

平安京左京七条四坊四町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇八―六

平安京左京七条四坊四町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京七条四坊四町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、京都市立下京渉成小学校建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成 20 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京七条四坊四町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区下珠数屋町通間之町東入東玉水町 296 番地
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2008 年 6 月 16 日～ 2008 年 8 月 22 日
- 5 調査面積 289 m²
- 6 調査担当者 西森正晃
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付した。ただし、礎石列と柱列については別に番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 西森正晃・前田義明
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 整理作業において、伊東史朗氏（元文化庁主任調査官）、浅田晶久氏（浅田製瓦工場）、大西時夫氏（有限会社丹嘉）にご教示をいただいた。記して謝意を申し上げる。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査の経緯	1
2. 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 第1面の遺構	3
(3) 第2面の遺構	6
(4) 第3面の遺構	8
3. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 出土遺物	10
4. ま と め	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1 第1面全景（北から）
		2 蔵77 検出状況（北から）
		3 溝53（東から）
図版2	遺構	1 蔵77（南西から）
		2 蔵77 布掘基礎断面（南から）
		3 蔵77 布掘基礎底部（東から）
図版3	遺構	1 第2面全景（北から）
		2 第3面全景（南から）
図版4	遺構	1 第3面全景（東から）
		2 土坑13（東から）
		3 土坑257（西から）
		4 柱列3：柱穴236（南から）
		5 柱列3：柱穴259（北から）
図版5	遺物	土坑13・32・70・162、井戸49、第1層出土遺物
図版6	遺物	井戸49・土坑153 出土土製品
図版7	遺物	第1層出土土製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（南から）	2
図4	調査風景（西から）	2
図5	東壁断面図（1：80）	3
図6	第1面遺構平面図（1：150）	4
図7	蔵77実測図（1：40）	5
図8	土坑13実測図（1：20）	5
図9	溝53実測図（1：40）	6
図10	土坑134実測図（1：40）	6
図11	第2面・第3面遺構平面図（1：150）	7
図12	柱列3実測図（1：80）	8
図13	溝271断面図（1：40）	9
図14	土坑257断面図（1：40）	9
図15	土坑88・井戸49・溝53・蔵77・第1層出土遺物実測図（1：4）	11
図16	土坑13・土坑70出土遺物実測図（1：4）	12
図17	第1層・井戸49・土坑154・土坑162出土遺物実測図（1：4）	13
図18	土坑153出土遺物実測図（1：4）	14
図19	溝110出土遺物実測図（1：4）	14
図20	土坑257出土遺物実測図（1：4）	14
図21	溝271出土遺物実測図（1：4）	15
図22	土坑32出土須恵器拓影・実測図（1：4）	15
図23	第1層出土瓦質仏像形拓影（1：3）	15
図24	「京師大絵図」（慶應義塾大学古文書室所蔵）に描かれた調査地一帯	17

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	9
表3	遺物観察表	19

平安京左京七条四坊四町跡

1. 調査の経緯

今回の調査地は、京都市下京区下数珠屋町通間之町東入東玉水町 296 番地であり、平安京左京七条四坊四町跡に該当する。当地は、皆山中学校の跡地であったが、下京渉成小学校の建設が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課による試掘調査が行われた。調査の結果、近世の石組み溝、中世の溝、整地層などが確認されたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行うことになった。

調査地が位置する四町跡の発掘調査は、今回が初めてである。平安時代後期には、同町南西部に参議藤原家保、三河守藤原定隆の邸宅が比定されている。「次郎焼亡」で有名な治承二年（1178）の火事は、同町南西部から出火している。中世には、調査地周辺は七条町の縁辺部にあたり、墓地として利用されていたことが、周辺の調査成果から判明している¹⁾。また、調査地西側には、手工業者を中心とした七条町が形成されていたことが、過去の周辺調査から判明している。桃山時代に至り、豊臣秀吉によって御土居が築かれたが、江戸時代前期に調査地を含む一帯が、東本願

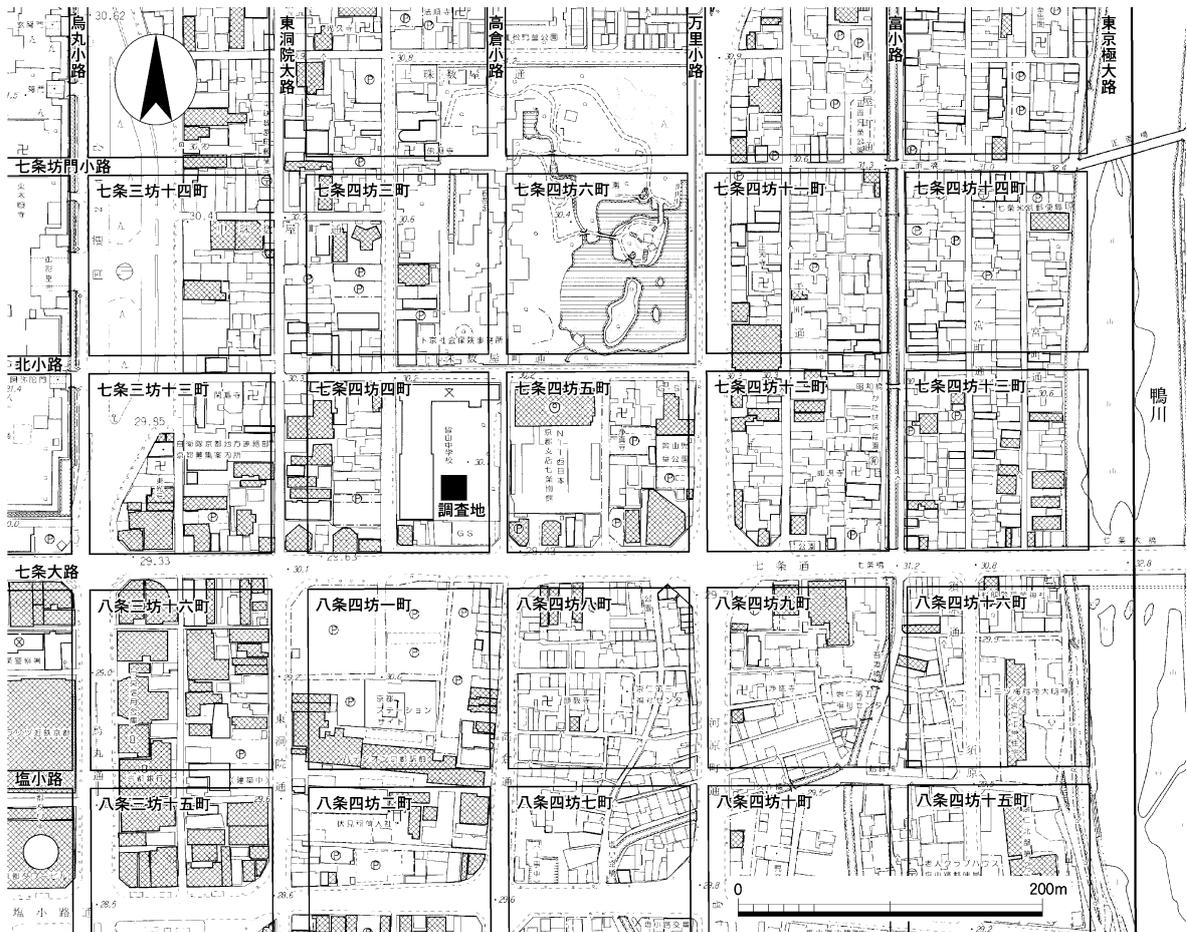


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

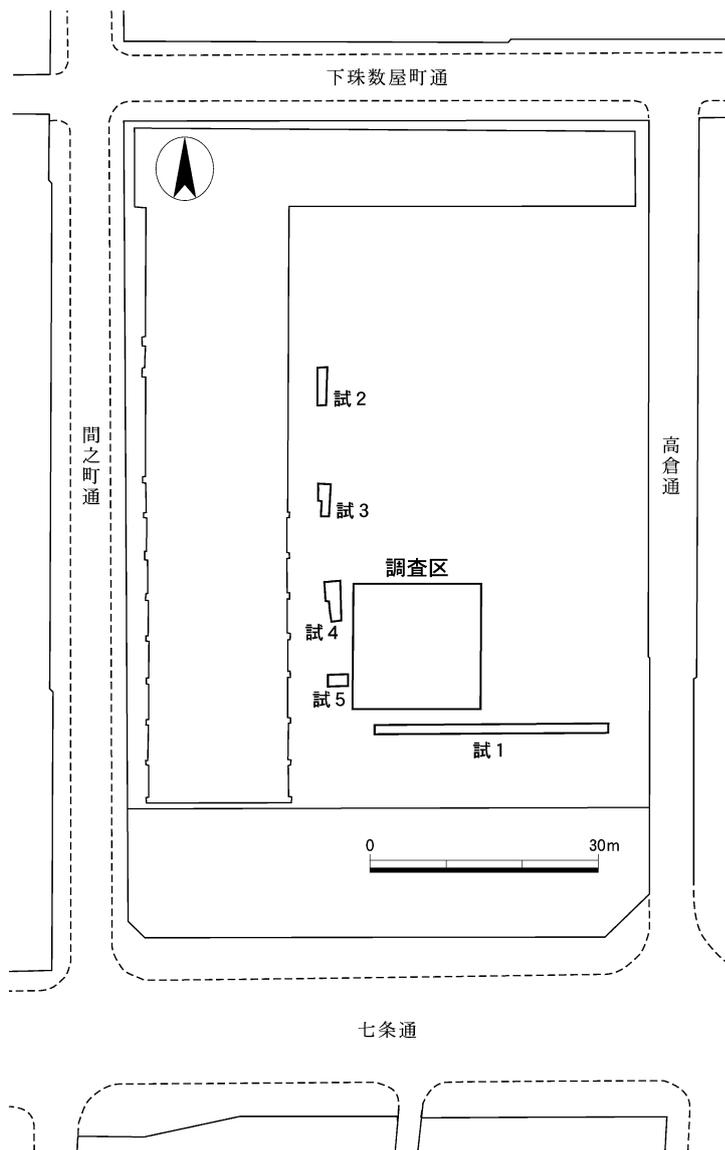


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

寺新寺内町として開発されるにあたり、東へ付け替えられた。さらに、高瀬川も付け替えられ、七条通には内浜と呼ばれる舟入が築かれている。その後、明治二年（1869）に皆山中学校の前身となる下京二十番組小学校が建設された。

周辺の調査成果と沿革から、今回の調査では、中世の七条町の縁辺部としての調査地の沿革、近世の内浜に関連する遺構の確認を目的とした。

調査の結果、室町時代以前の流れ堆積、室町時代後期の自然流路、柱穴列、土坑、耕作溝、桃山時代の耕作溝、江戸時代前期の土坑、中期の土坑、柱穴、後期の石組み溝、土蔵、礎石列、井戸などを確認した。



図3 調査前全景 (南から)



図4 調査風景 (西から)

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の基本層序は、地表面から厚さ約1mの近現代盛土の下は、炭化物、炭を多量に含む黒色粘質土が主体となる江戸時代中期の整地層(第1層)、黒褐色シルトと暗灰黄色砂礫が主体となる桃山時代から江戸時代前期の整地層(第2層)、灰色細砂が主体となる平安時代から鎌倉時代までの遺物を含む流れ堆積(第3層)である。下層の確認のため、最大GL-3mまで掘り下げを行ったが、無遺物層は確認できなかった。

調査は、3面に分けて行い、第1層上面を第1面、第2層上面を第2面、第3層上面を第3面とした。第1面は17世紀後葉～19世紀中頃、第2面は16世紀中頃～17世紀後半、第3面は15世紀後半～16世紀前半の遺構が主体となす。

(2) 第1面の遺構(図6、図版1)

第1面は、調査区中央の溝53を境に、基盤となる整地層に違いが見られ、遺構の様相も異なっている。

溝53(図9、図版1)調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅1.2m、深さ0.4mで、長さ15.5mにわたって検出した。調査区の西側では、長辺0.3～0.5mの花崗岩製切石の石組が1段残っている。埋土は黒褐色砂質土であり、17世紀後葉から19世紀初頭の遺物が出土している。

蔵77(図7、図版1・2)調査区南部で検出した土蔵の床面および基礎である。周囲に口の字状の布掘を巡らし、中央に漆喰の床を貼る。漆喰は、東西2.3m、南北1.9mの範囲で、厚さ0.05mである。布掘りの溝は、幅1.0～1.2mで、東西4.9～5.1m、南北4.9～5.1m、

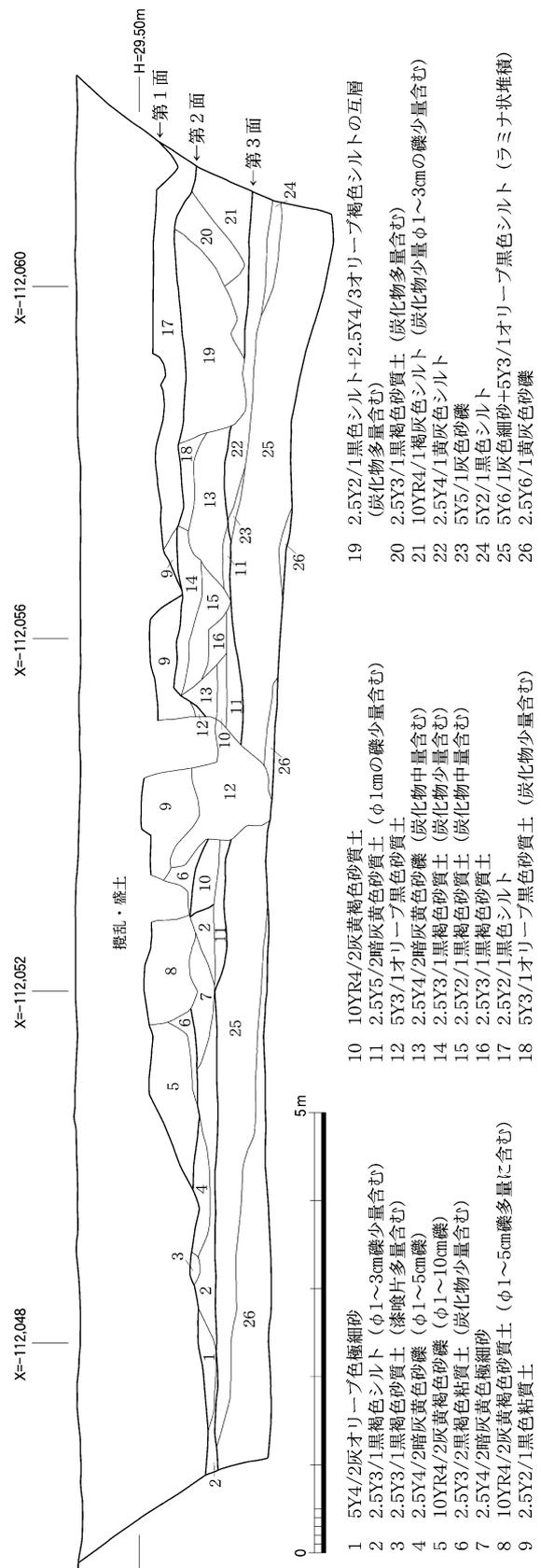


図5 東壁断面図(1:80)

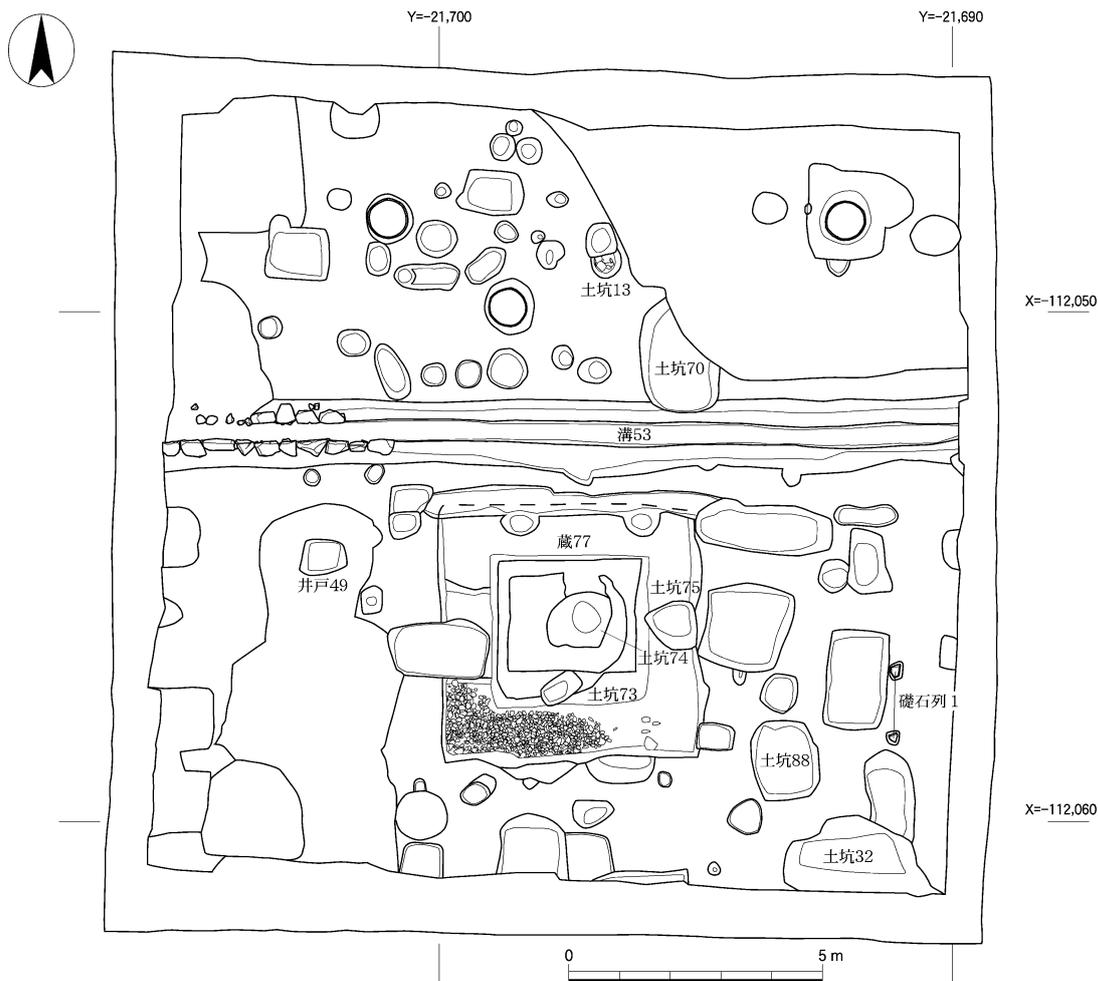


図6 第1面遺構平面図（1：150）

深さ 0.8～0.9 mである。南辺の底は一段下がっており、直径 0.05～0.15 mの河原石が敷き詰められている。埋土は、砂礫と灰色粘質土の互層であり、17世紀後半から18世紀初頭の遺物が出土している。

土坑 13（図8、図版4） 調査区北部で検出した土坑である。北半を攪乱されるが平面形は楕円形と考えられ、短径 0.6 m、深さ 0.15 mである。埋土は褐色砂質土で、埴塙が計3個体分出土している。

土坑 88 調査区南東部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、短辺 1.3 m、長辺 1.55 m、

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	溝、土坑、柱列1条	
江戸時代	土坑、柱列1条、蔵1棟、礎石列1条、石組み溝1条	

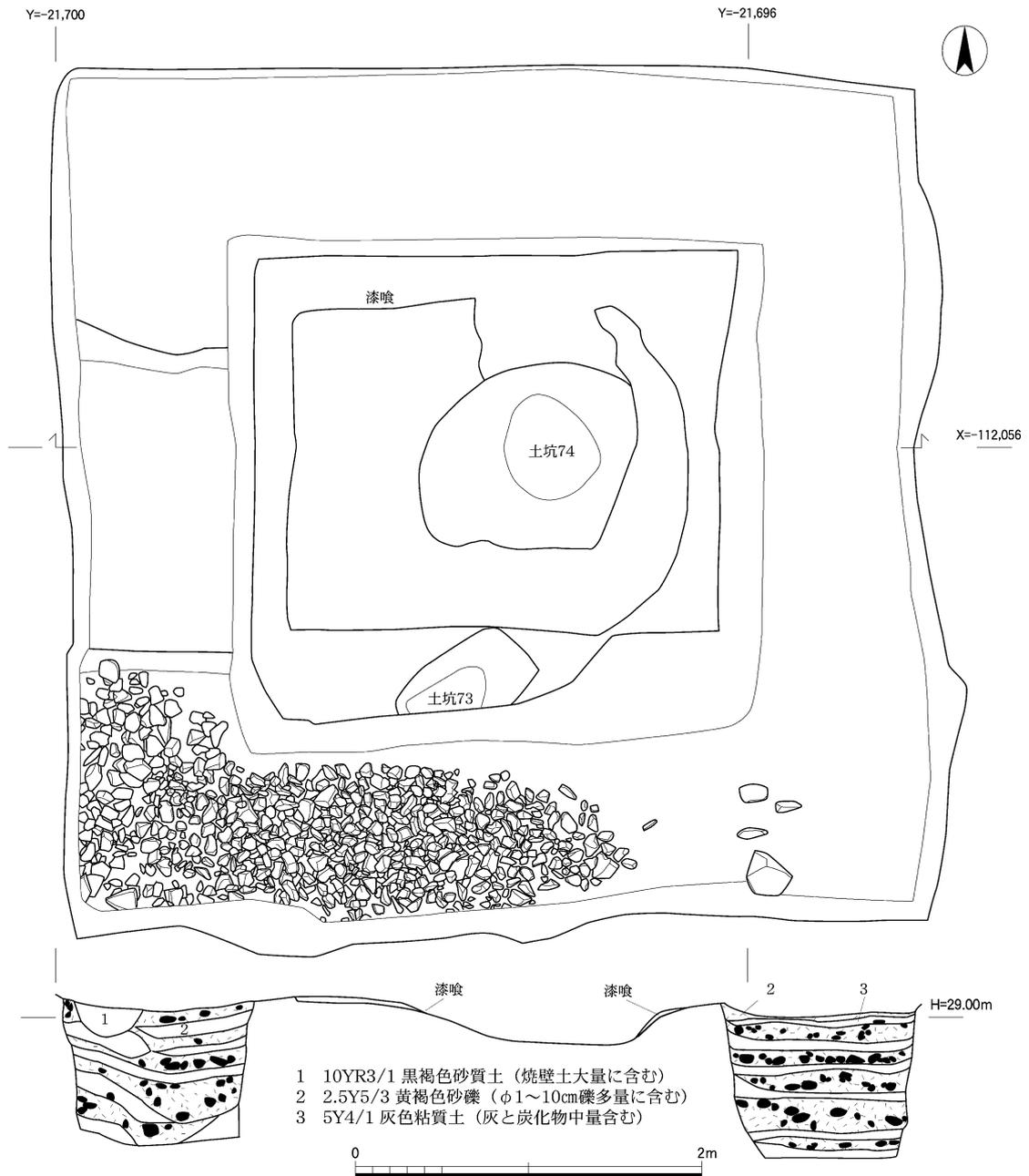


図7 蔵77実測図(1:40)

深さ0.45mである。埋土は炭化物を多量に含む黒色粘質土で、18世紀中頃の遺物がまとまって出土した。ゴミ捨て穴と考えられる。

礎石列1 調査区南東部で検出した南北方向の礎石列である。1間分のみを検出であるが、南側にさらに続く可能性がある。礎石は、径0.15~0.25mであり、礎石間は1.3mである。

土坑73~75 調査区南部で検出した土坑である。蔵77が廃絶した後に造られている。いずれも径0.5~1.2mの歪な楕円形で、深さ0.2mである。埋土から多量の銅滓が出土してい

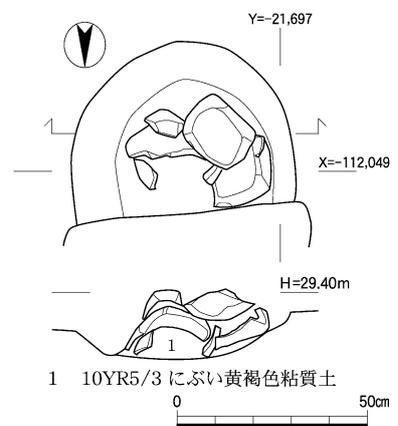


図8 土坑13実測図(1:20)

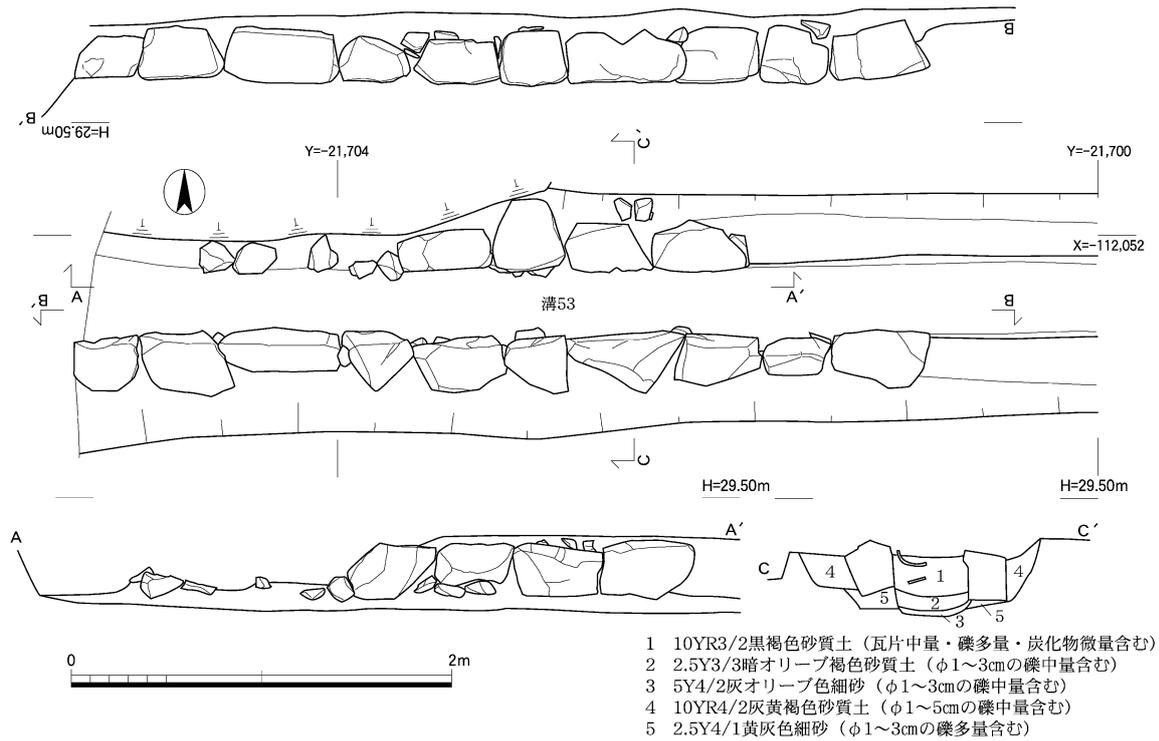


図9 溝53実測図（1：40）

る。

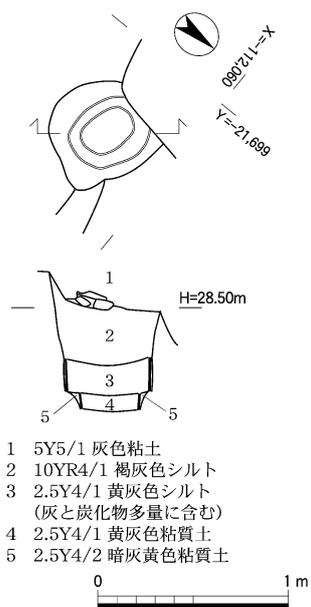
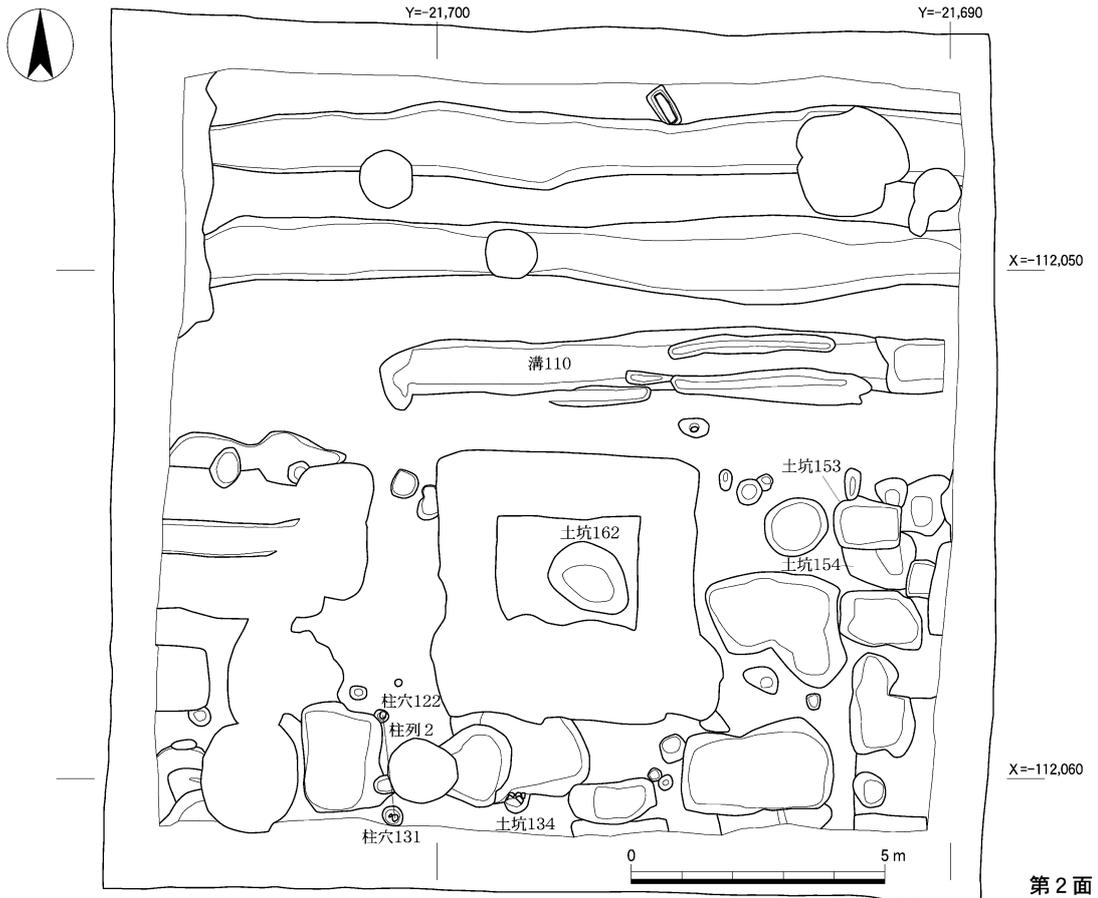
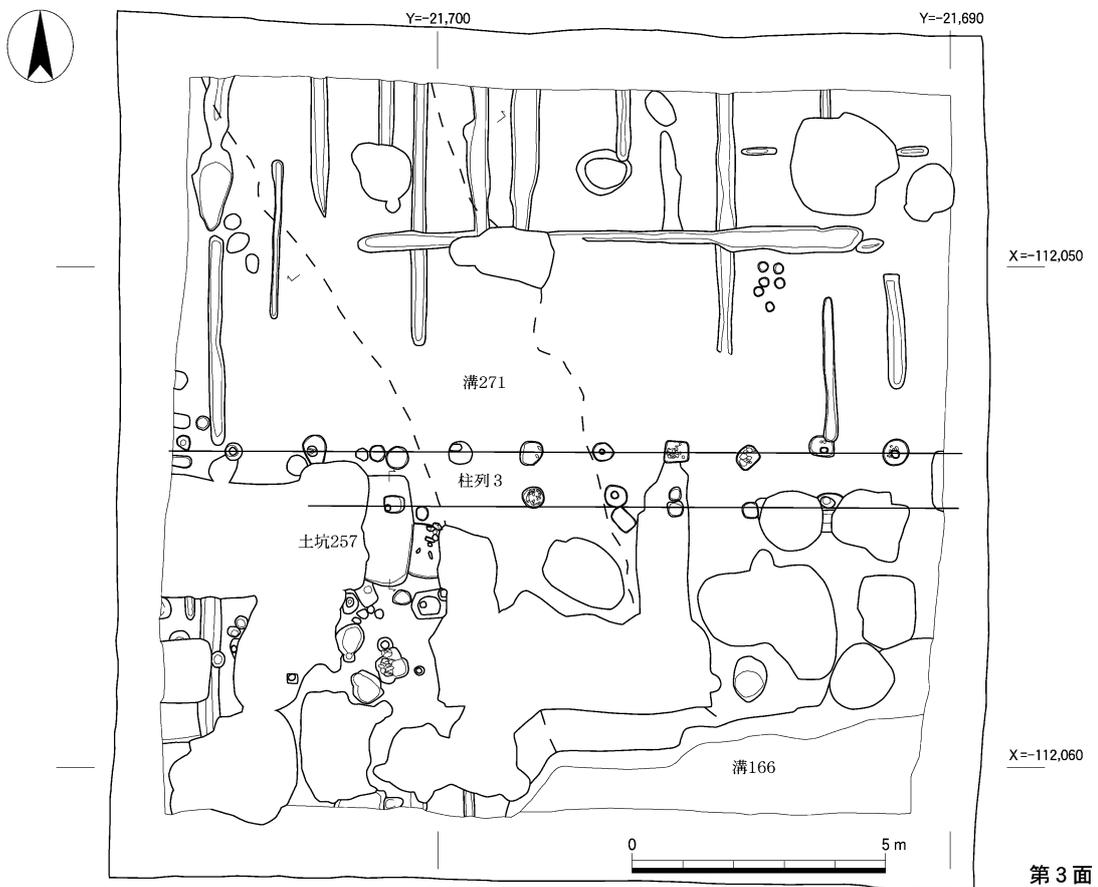


図10 土坑134実測図（1：40）



第2面



第3面

图11 第2面·第3面遺構平面図(1:150)

(3) 第2面の遺構 (図 11、図版 3)

調査区全体で検出したが、X=-112,053 付近を境に、南北で遺構の様相が大きく異なっている。北側では、室町時代後期から江戸時代前期にかけての耕作溝を検出したが、南側では、江戸時代前期から中期にかけての土坑を中心とした遺構が多い。

土坑 134 (図 10) 調査区南部で検出した土坑である。平面形は円形で、径 0.5 ~ 0.6 m、深さ 0.7 m である。埋土は、黄灰色粘質土を主体とするが、上層では河原石を敷いた上に粘土で固め地業を行っており、何らかの基礎と考えられる。また、底には 2 段の木枠が認められる。両者は、別の遺構または造り替えの可能性も考えられる。遺物は埴塼片が出土しているが、壁面は焼けていない。

土坑 153 調査区東部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、直径 0.5 m、深さ 0.7 m である。埋土は黒褐色粘質土、黒色シルトであり、17 世紀後半の遺物がまとめて出土している。

柱列 2 調査区南西部で検出した南北方向の柱列である。柱穴は調査区内では 2 基検出した。方位は北に対してわずかに西に振っている。2 基ともに直径は 0.25 m、深さ 0.2 m で、底には根石を置く。埋土は黄灰色シルトである。遺物は出土していない。

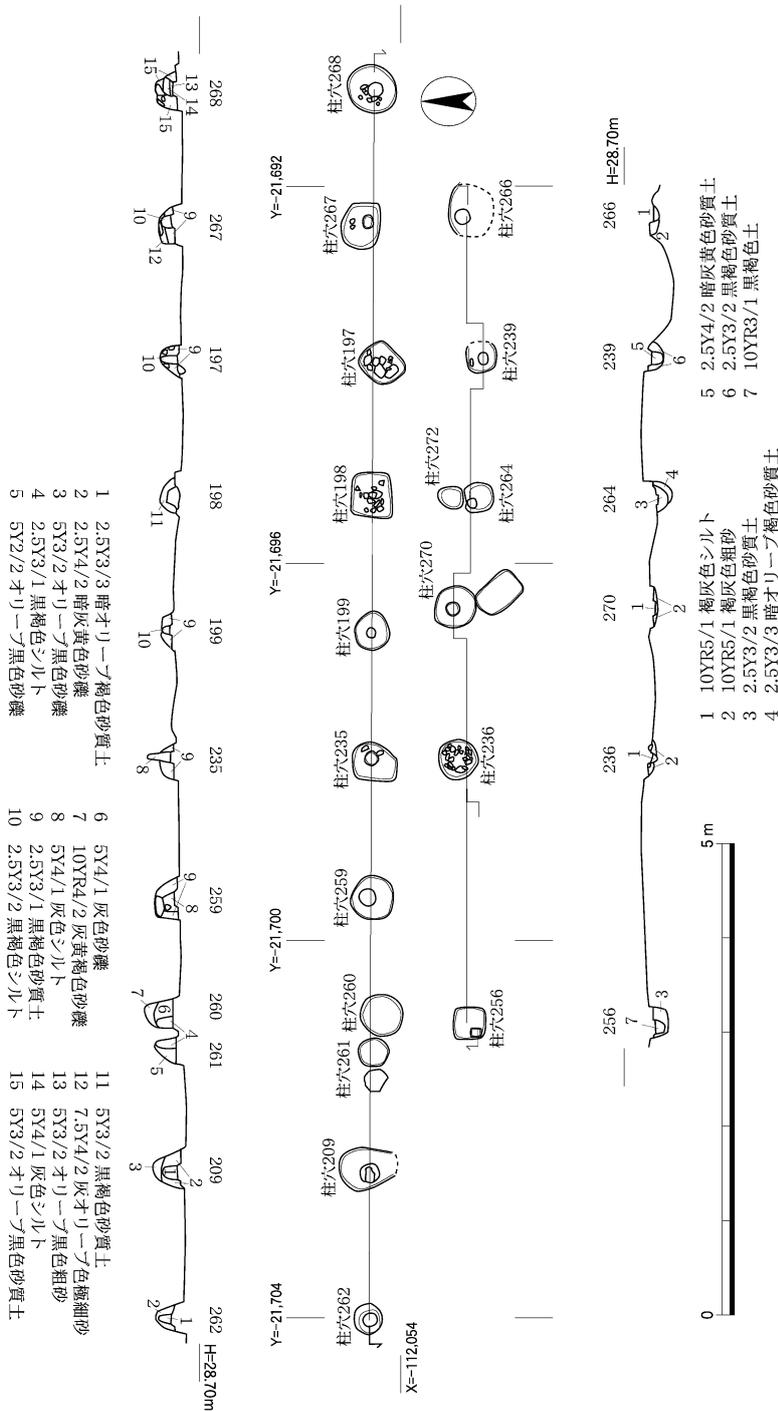


図 12 柱列 3 実測図 (1 : 80)

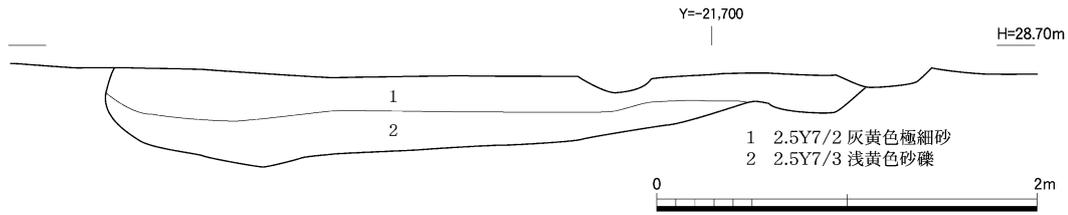


図 13 溝 271 断面図 (1 : 40)

(4) 第 3 面の遺構 (図 11、図版 3・4)

調査区全体で検出しているが、南西部に集中している。

小溝群 調査区南東部を除く全域で検出した溝である。東西方向と南北方向の溝があるが、東西方向のものが新しい。埋土は黒褐色砂質土で、遺物は細片のみである。並行して並ぶことから、耕作溝であろう。

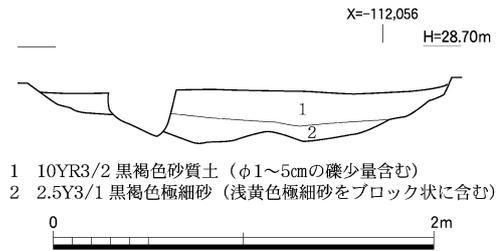


図 14 土坑 257 断面図 (1 : 40)

柱列 3 (図 12、図版 4) 調査区中央で検出した東西方向の柱列である。一部攪乱で壊されているが、対になった 2 基の柱穴を 9 間分検出し、4 基には根石がある。根石がない柱穴でも、石を入れた柱穴が多い。礎石の根固めのためか、柱を抜き取った後に入れたものかは不明である。柱穴の平面形は、隅丸方形と円形であり、径 0.3 ~ 0.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。柱間は約 1.5 m である。遺物は土師器皿の細片が少量出土したのみである。対になる 2 基の柱穴が並ぶことから、築地跡と考えられる。

土坑 257 (図 14、図版 4)

調査区西側で検出した土坑である。西辺は攪乱されているが、長方形の土坑と思われ、南北 2.2 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は黒褐色砂質土で、16 世紀前半の遺物が出土している。

溝 166 調査区南東部で検出した溝である。南肩と東肩は調査区外である。確認した深さは 0.5 m。埋土は上層が黄灰色シルト、下層が黒色シルトであり、滞水していたものと考えられる。遺

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器、瓦器、須恵器、施釉陶器、輸入磁器、石製品、土製品	2箱	土師器7点、瓦器2点、須恵器1点、施釉陶器1点、輸入磁器1点、石製品1点、土製品1点	1箱	0箱
江戸時代	土師器、瓦器、陶器、磁器、焼締陶器、土製品、伏見人形、金属製品	55箱	土師器15点、瓦器2点、陶器14点、磁器8点、焼締陶器3点、土製品12点、伏見人形5点、金属製品1点	24箱	25箱
合計		57箱	74点 (7箱)	25箱	25箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

物は少量であるが、15世紀代のものが出土している。

溝 271(図 13) 調査区を北西から南東にのびる溝である。一部で断割を行った。長さ 14 m以上、幅 2.5 ～ 4.0 m、深さ 0.4 mである。埋土は灰黄色極細砂と浅黄色砂礫で、側面が抉られていることから、洪水による自然流路と考える。15 世紀中頃から後半の遺物が出土している。

3. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、コンテナ 50 箱分の遺物が出土した。遺物の内容は、土器類、陶磁器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品などで、平安時代から明治時代までの遺物である。大半は、江戸時代の遺物であり、土坑、井戸からの出土が多い。室町時代後期以前の遺物は、上層の遺構または下層の流れ堆積から出土したものである。なお、江戸時代後期の遺構の一部からは、埴塼、銅滓が出土している。

ここでは、新しい時代から順に、まとまった量の遺物が出土した遺構のものを中心に概略を述べる。個々の遺物の詳細は、表 3 の遺物観察表に掲載した。

(2) 出土遺物

土坑 88 出土遺物 (図 15) 遺物の内容は、土師器、国産施釉陶磁器、貝殻、金属製品などがある。国産施釉陶器は、京都、瀬戸美濃、唐津、伊万里産に分類される。遺物の年代は、18 世紀中頃から後半に属する。

土師器については、皿は少量で細片であるため、図示していない。焙烙 (9) は外面の一部にススが付着している。深草産と思われる。

京焼には、油受皿 (1・2)、燭台 (3)、急須蓋 (4)、椀 (6)、鍋 (7) などがある。1・2 は油受皿で、いずれも灰釉が施され、受部は口縁部より高いものと低いものがある。4 は、急須の蓋で、つまみは菊をかたどっている。7 の鍋は、鉄釉が施され、把手が付くものと思われる。

瀬戸・美濃には、蓋 (5) がある。鉄釉が施され、鼠志野を模倣したものと思われる。

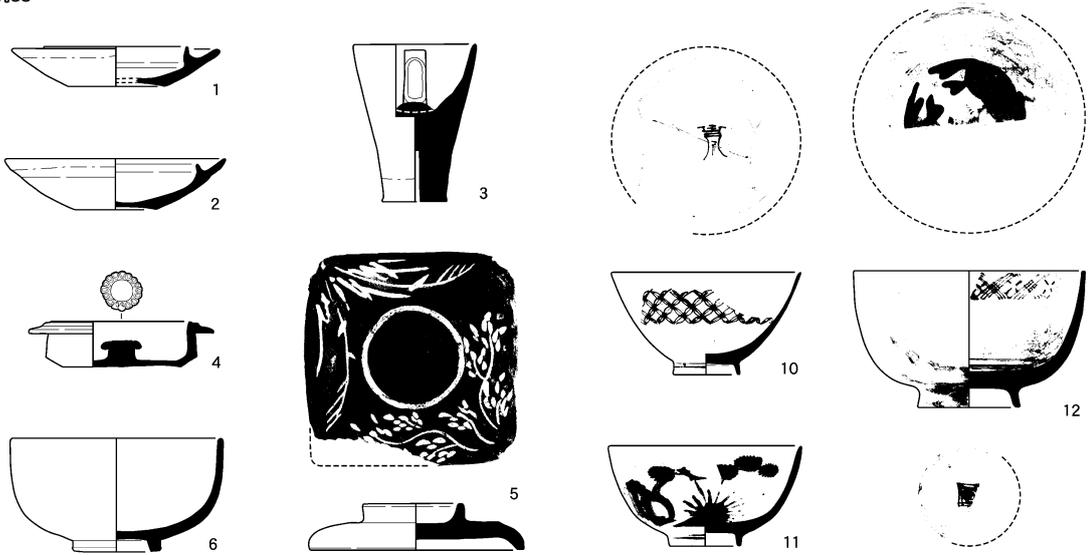
唐津には、刷毛目鉢 (8) がある。内面に鉄釉、外面に刷毛目を施す。

伊万里では、椀 (10・11)、青磁染付の椀 (12) がある。10 は底部内面に梵字が記されている。12 は、内面口縁部に四方禪文を施す。高台内には、崩れた角福が記される。

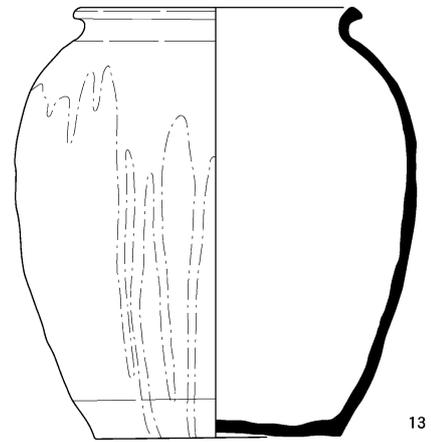
井戸 49 出土遺物 (図 15・17、図版 5) 出土遺物には、土師器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、瓦、土製品、金属製品などがある。遺物の年代は、17 世紀後半から 19 世紀中頃に属する。出土した遺物の年代にまとまりがないため、ここでは、信楽の甕 (13) と播鉢 (31) を取り上げる。

甕は、ほぼ完形の甕で、内面を灰釉、外面を鉄釉が施され、外面口縁部から肩部にかけて、灰釉を漬け掛けしている。播鉢は鉄釉で、播目はかなり摩耗している。

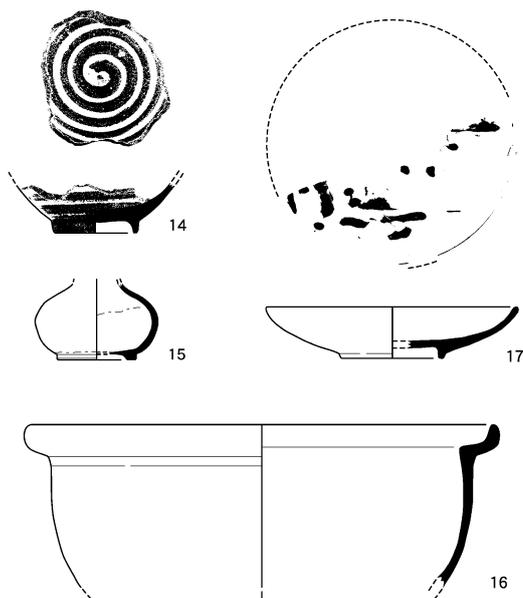
土坑88



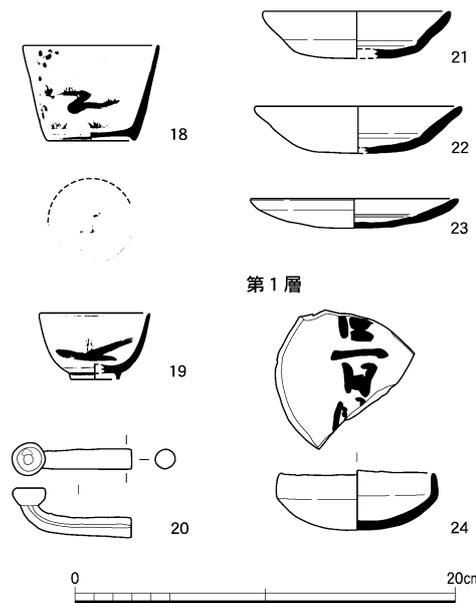
井戸49



溝53



藏77



第1層



图 15 土坑 88 · 井戸 49 · 溝 53 · 藏 77 · 第 1 層出土遺物実測図 (1 : 4)

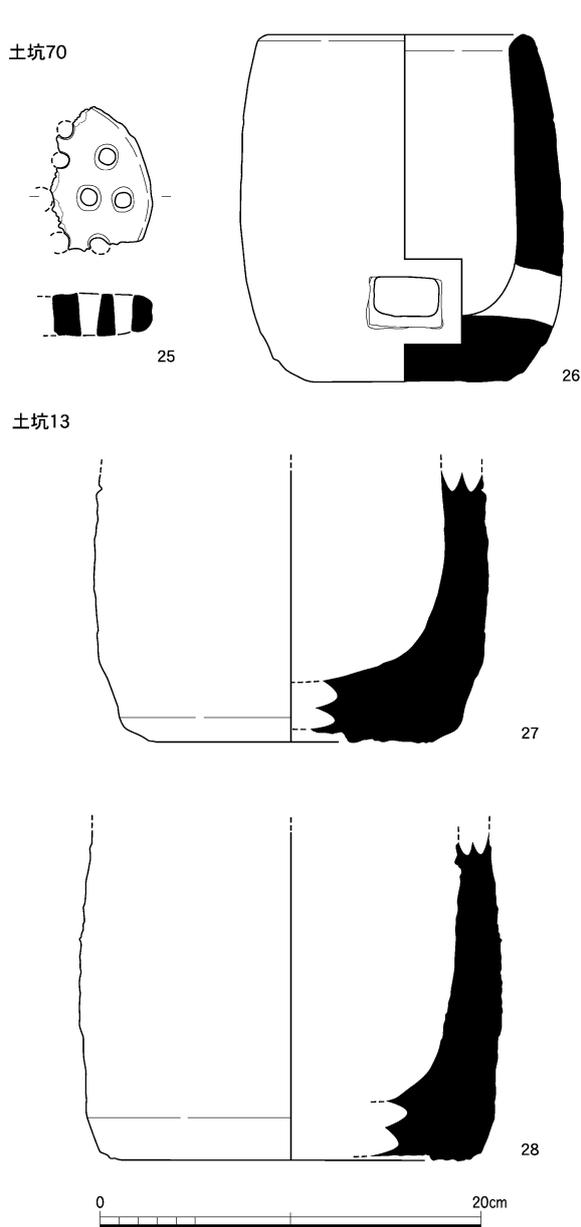


図 16 土坑 13・土坑 70 出土遺物実測図 (1 : 4)

溝 53 出土遺物 (図 15) 出土遺物は、土師器、須恵器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、金属製品などが出土しているが、少量である。遺物の年代は、17 世紀後半から 19 世紀前半に属する。

唐津には、椀 (14) がある。内外面ともに刷毛目が施されている。

京焼には、瓶 (15)、土鍋 (16) がある。土鍋には鉄釉が施され、把手がつくものと思われる。

伊万里には、皿 (17)、猪口 (18)、椀 (19)、鉢などがある。17・19 は、内面に山水文が施され、高台畳付に砂目痕が認められる。18 は、外面に山水文が施され、高台内には銘が認められる。

金属製品には、煙管の雁首 (20) がある。真鍮製である。鍛造で成形され、伸ばした金属板を丸めて、真鍮で鑲着している。

蔵 77 出土遺物 (図 15) 出土遺物は、土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、輸入磁器、金属製品、土製品などがあるが、少量である。遺物の年代は、17 世紀後半から 18 世紀初頭に属する。ここでは、土師器皿 (21～23) のみ図示した。

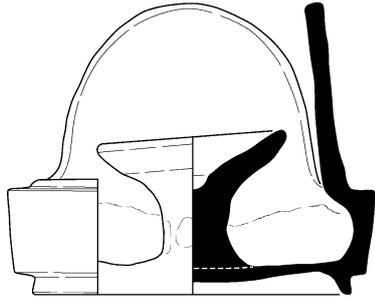
21～23 は、丸底気味の底部から体部が外上方にのびる。いずれも内面底部と体部の境目に凹状圈線を巡らす。23 のみ圈線が二重になっている部分がある。調整は、内面底部ナデ、体部から外面口縁部にかけて横ナデ、外面体部から底部がオサエである。

第 1 層出土遺物 (図 15・17、図版 5) 整地層である第 1 層からは、土師器、国産施釉陶器、焼締陶器などが出土している。遺物の年代は、17 世紀後半に属する。ここでは、土師器鉢 (24)、播鉢 (32) を図示した。

24 は、丸底気味の底部から体部が真っ直ぐ上方に立ち上がる。調整は、内面ナデ、外面オサエである。内面底部に「□一日□」の墨書がある。32 は、丹波焼の播鉢である。鉄釉が施され、播目は摩耗している。

土坑 13・70 出土遺物 (図 16、図版 5) 土坑 13・70 からは、鑄造関係の遺物が出土している。

土坑162



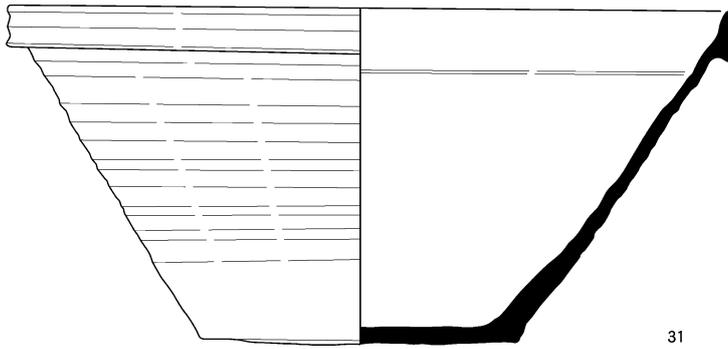
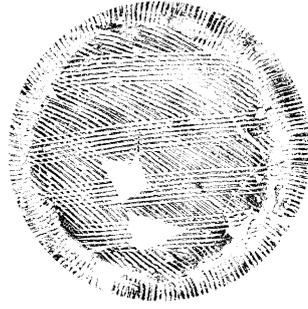
29

土坑154



30

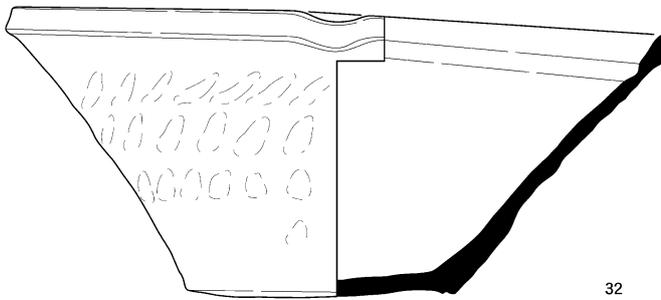
井戸49



31



第1層



32

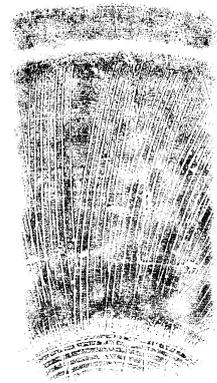


图17 第1層・井戸49・土坑154・土坑162出土遺物実測図(1:4)

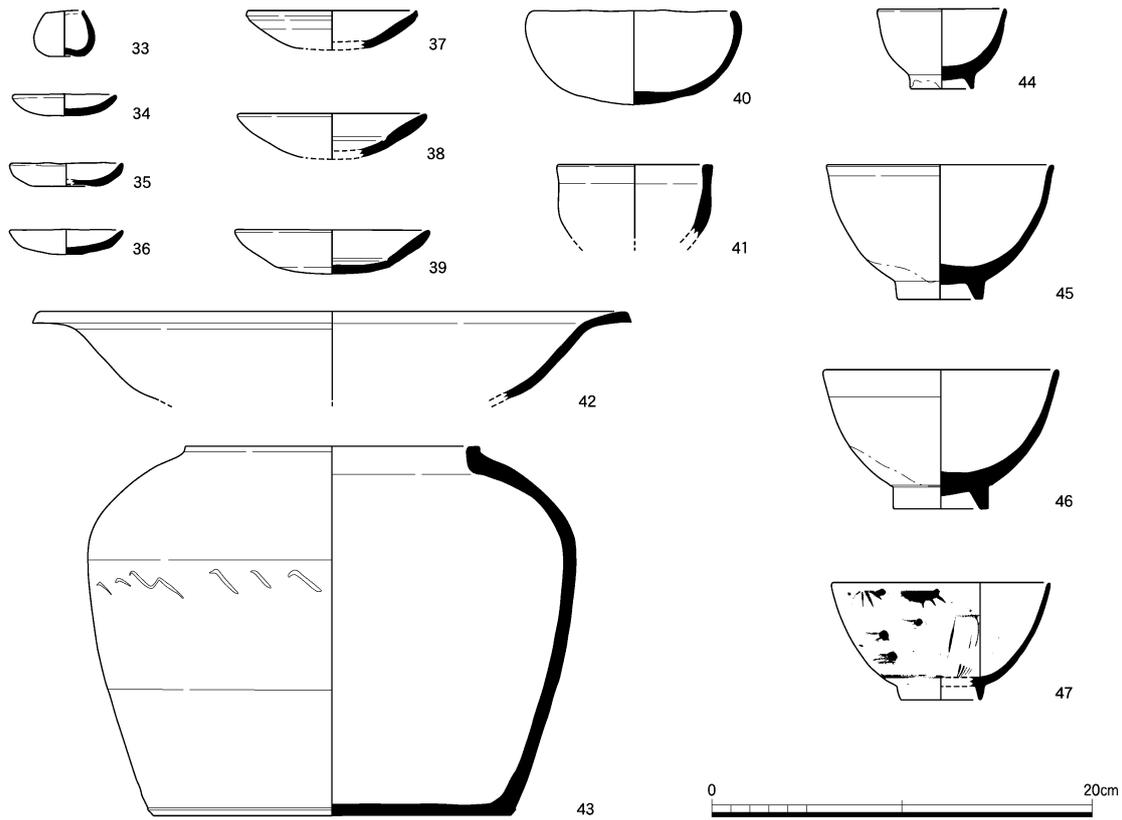


図18 土坑153出土遺物実測図(1:4)

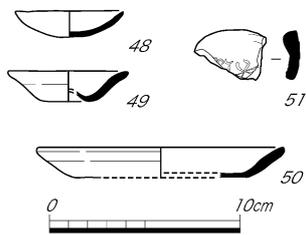


図19 溝110出土遺物実測図(1:4)

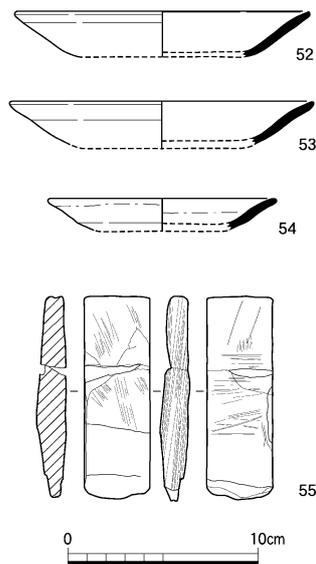


図20 土坑257出土遺物実測図(1:4)

25は炉の蓋と考えられる。26～28は坩堝で、27には青銅が付着している。

土坑162・154出土遺物(図17、図版5)29は、瓦質の灯火具で、いわゆる瓦灯の身の部分である。内面底部上に受け皿を置き、一方に風除が付く。口縁部が受け口状になっていることから、釣鐘形の蓋が付くものと考えられる。

30は伊万里産染付の皿で、内面に幾何学文、高台端面に砂目痕が残る。

土坑153出土遺物(図18)出土遺物には、土師器、瓦器、国産施釉陶磁器などがある。遺物の年代は、17世紀後半に属する。

土師器では、壺(33)、皿(34～39)、鉢(40)、焙烙(42)、壺(43)が出土している。33は小型壺で、いわゆるつぼつぼと呼ばれるものである。調整は、内面ナデ、外面は丁寧なおサエである。皿は、大小2系統に分かれる。小型の皿34～36は、色調は赤色系を呈し、調整は内面ナデ、外面おサエである。大型の皿37～39は、色調は

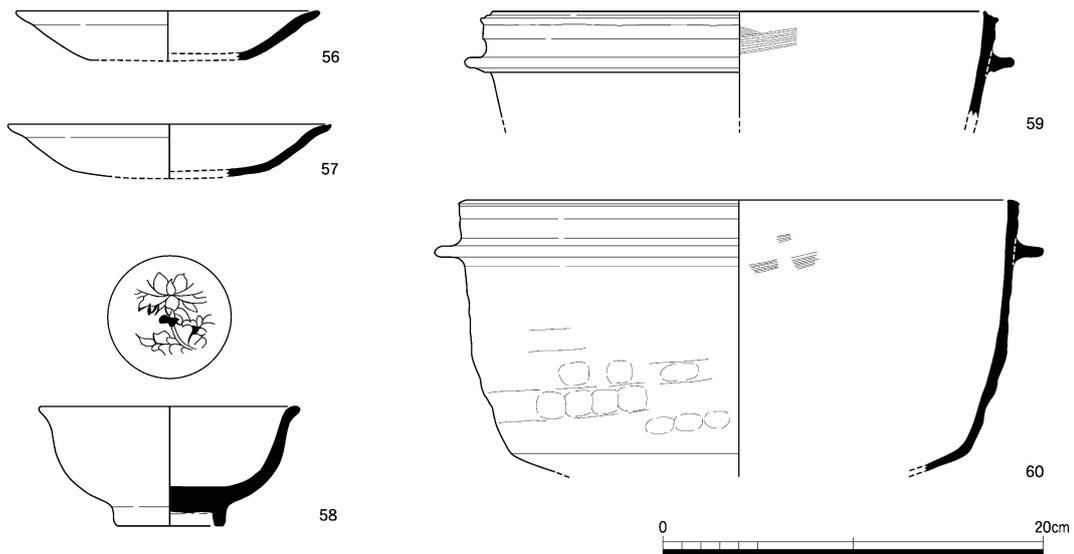


図 21 溝 271 出土遺物実測図 (1 : 4)

薄い赤色系から白色系で、内面底部と体部の境目に凹状圈線を巡らす。調整は、内面底部ナデ、体部から外面口縁部横ナデ、底部外面オサエである。43 は、火消し壺である。内面は被熱により、剥離が激しい。

41 は瓦質の火入れである。調整は、内面ナデ、外面は丁寧なミガキである。

瀬戸美濃では小型の天目茶碗 (44) が、唐津では青釉陶器 (45・46) の碗が出土している。

47 は伊万里産染付の碗で、外面に草花文を表す。

溝 110 出土遺物 (図 19) 出土遺物には、土師器、国産施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、土製品などがあるが、少量で細片のものが多く。遺物の年代は、16 世紀代に属する。

図示できたのは、土師器皿 (48～50) と鋳型 (51) である。48 は、にぶい橙色の胎土で、調整は、内面ナデ、外面オサエである。49 はへそ皿で、胎土は淡黄色を呈す。50 は平らな底部から、外上方に体部が開く。色調はにぶい橙色を呈す。

51 は鋳型と考えられる。細片のため、鋳型の種類を同定することはできなかった。胎土は粗い。

土坑 257 出土遺物 (図 20) 出土遺物には、土師器、国産施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、石製品などがある。遺物の年代は、15 世紀後半から 16 世紀前半に属する。

土師器では、皿 (52・53) がある。平らな底部から外上方にほぼ真っ直ぐに体部がのびる。口縁端部をわずかにつまみ上げる。54 は、瀬戸美

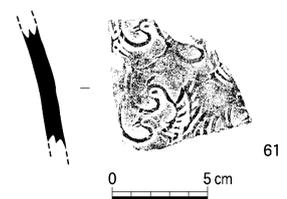


図 22 土坑 32 出土須恵器 拓影・実測図 (1 : 4)

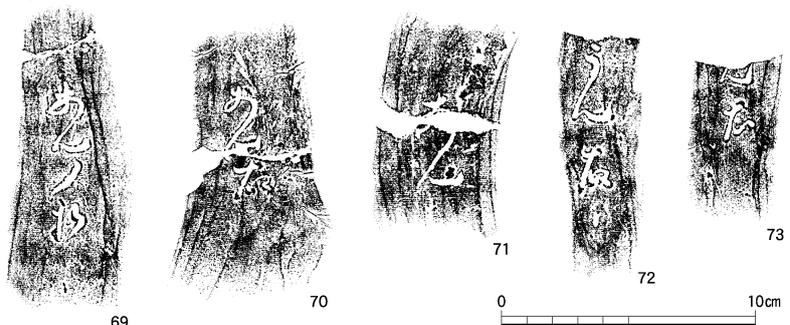


図 23 第 1 層出土瓦質仏像形拓影 (1 : 3)

濃産の施釉陶器の皿である。

石製品では、粘板岩の砥石（55）がある。上下面を除く全面に擦痕が認められるが、一面のみ、溝状に擦痕が残る。

溝 271 出土遺物（図 21）出土遺物には、土師器、瓦器、焼締陶器、輸入磁器などがある。遺物の年代は、14 世紀から 15 世紀後半に属する。

土師器は皿（56・57）が出土している。体部は、直線的にのび、口縁端部が外側に屈曲する。

58 は、龍泉窯の青磁椀である。高台内側を除き、全面施釉。器壁は厚い。見込みに一重圏線、その内側にスタンプで花文が施されている。14 世紀代に属する。

瓦器は羽釜（59・60）が出土している。ともに外面ユビオサエ、内面横ハケが施されるが、60 の内面は、横ハケ前に板状の工具でナデを施す。

土坑 32 出土遺物（図 22、図版 5）第 1 面の遺構であるが、中世に属すると思われる須恵器の甕（61）が出土している。内面は、当て具痕をナデ消し、外面には鳥のスタンプ文が施される。混入品である。東海地方の古常滑産あるいは渥美半島窯跡群産の製品と史料される。

土製品（図 23、図版 6・7）江戸時代の遺構から、多くの土製品が出土している。

62 は、瓦質の土製品で全長 40.5 cm、幅 14.5 cm、高さ 21.6 cm の牛形である。型で成形されており、頭、胴体、足を別々に型作りした後、接合されている。腹部は空洞であり、背中内面には、「大□守 又吉 牛□□ □□ □□」の墨書が認められる。牛の土製品は、小型のものでは、瘡瘡除けのおまじないとして、腹部に米粒を詰め、川に流す風習があるが、大型のものは、あまり類例が認められない。井戸 49 から出土した。

68～74 は、瓦質でつくられた等身大の仏像形破片である。右足の一部と、衣の襷が認められる。襷の根本には孔が穿たれていることから、組み合わせ式の仏像形である。襷の裏側には、「あんの左」「うんの右」と刻まれていることから、仁王像を形取っていると考えられる。68 は右足、69～74 は衣の襷で、その裏面には 69 「あんの左」、70 「あんの右」、71 「あんの」、72 「うんの右」、73 「□んの左」とヘラ描きされている。少なくとも 2 個体分あると思われる。第 1 層から出土した。

今回出土した瓦質仏像形の出土は稀少であるが、牛形土製品も含めて、瓦職人によって、京都近辺で製作されたと考えられる。当該地の北西部にあたる東本願寺界隈で現在も商われている仏具専門店をみると、江戸時代には、金属製品を模倣した瓦質仏具も製作されていた可能性がある。

63～67 は、伏見人形である。全て型作りの素焼きである。63 は翁、67 は鳩、66 は皿に載る鯛、64・65 は千手観音である。土坑 153 から出土した。

4. まとめ

ここでは、調査の目的である中世七条町の縁辺部としての当地の沿革と、近世の内浜に関連する遺構を中心に述べる。

今回の調査では、室町時代から江戸時代後期に至る遺構、遺物を確認した。室町時代以前の遺

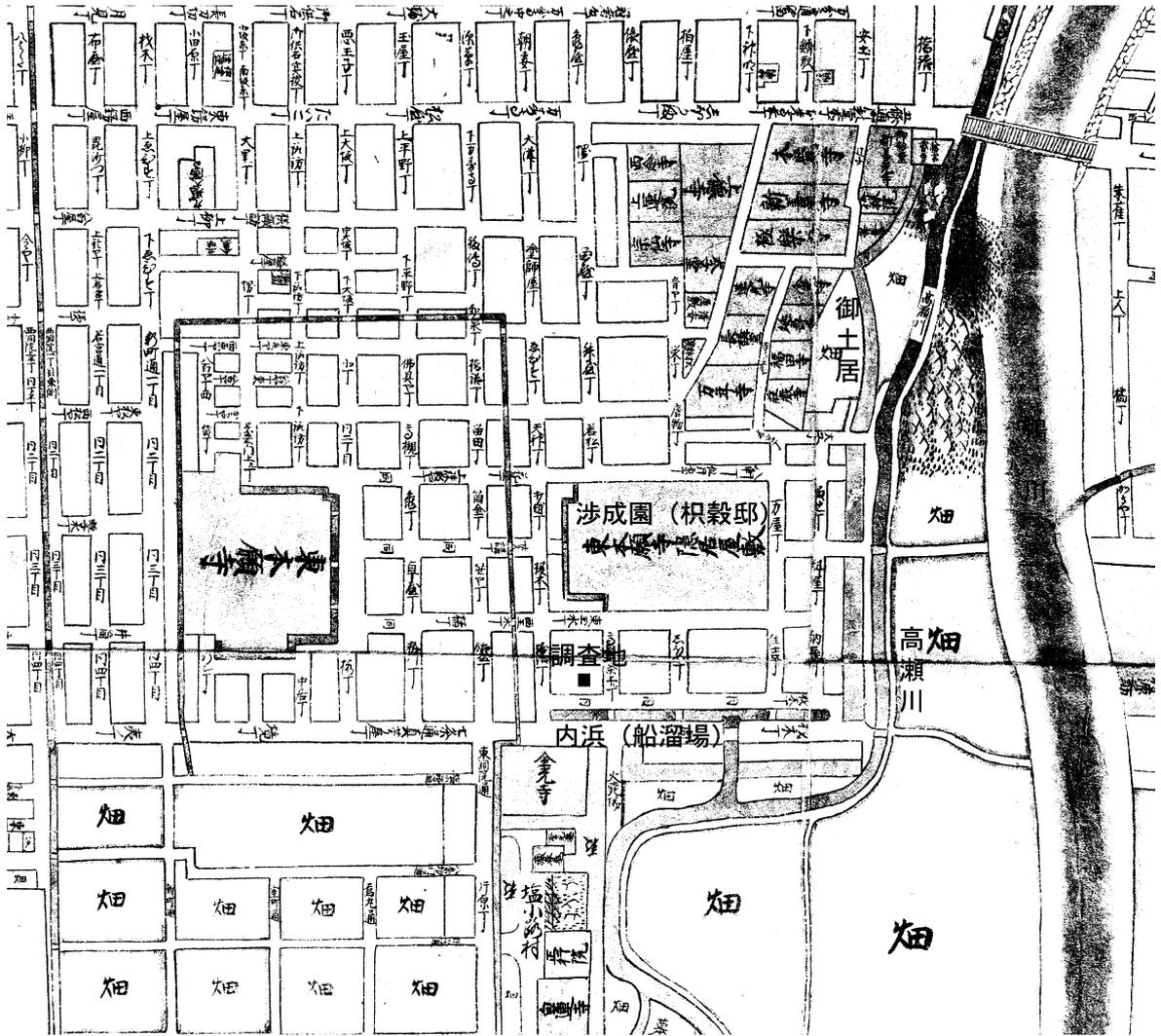


図 24 「京師大絵図」(慶應義塾大学古文書室所蔵)に描かれた調査地一帯
「元禄十四年實測大絵図(後補書題) 元禄 14 (1701)年」『慶長 昭和 京都地図集成』より抜粋、加筆修正し転載した。

物も確認しているが、流れ堆積から出土したものがほとんどである。周辺の調査成果では、平安時代後期に至って開発が進み、中世の手工業者が集う七条町として開発されていく様相を示しており、調査地の西側では墓地として土地利用されていることが明らかになっている。しかし、当地では、室町時代以前の遺構は、鴨川の洪水によって流出したものと考えられ、確認できなかった。

室町時代(第3面)に至っても、溝 271 の存在が認められるように、土地は不安定であったと思われる。その後、15 世紀後葉から 16 世紀前半にかけて、黄褐色極細砂が堆積する南西部に集中して遺構が築かれるが、土地利用の痕跡は希薄である。その後、X=112,054 付近に築地跡と考えられる柱列 3 が築かれる。これらの遺構は、短期間の内に廃絶し、耕作地となり、近世を迎える。桃山時代から江戸時代前半(第2面)では、X=112,053 付近を境に、南北で様相が異なっている。北側では、引き続き耕作地として利用されているが、南側では、17 世紀中頃以降、急激に遺構、遺物の量が増えていることがわかる。検出した遺構は、破損した遺物が大量に廃棄された土坑が多く、町屋建物の裏側の状況を示している。これは、寛永十八年(1641)の東本願寺新寺内町の形成、慶安元年(1648)の内浜建設以降、周辺一帯が開発されていく様相を示している。内浜は、

調査地南側の七条通を拡幅して築かれており（図 24 絵図³⁾参照）、検出した遺構は、内浜に面した南北棟の町屋の一面であると考えられる。調査区北側が引き続き耕作地であることは、内浜に面した場所にのみ町屋が形成されていったことを表している。

その後、調査区全体が、17 世紀後葉から 18 世紀初頭の遺物を含む整地層に覆われ、江戸時代中期から後期にかけての遺構面が成立している（第 1 面）。下層から引き続き、町屋の一面として土地利用がなされている。蔵 77 は、漆喰の床を持ち、口の字状の掘込地業を行っており、土蔵の床と基礎である。礎石列 1 は、蔵 77 と並行しており、町屋の区画を示している。また、東西方向の溝 53 を境にして、南北で基盤となる整地層も遺構の様相も異なっていることから、溝 53 は土地境を表す区画溝であるといえる。遺構の状況からも、調査区南側は、内浜に面した南北に長い地割りの町屋の状況を示している。調査区北側も井戸、土坑などが確認できることから、町屋の裏側である可能性が高い。試掘調査では、調査区の西側に接した場所で、南北方向の石組み溝を検出しており、底部のレベル、花崗岩の切石積など溝 53 と共通する様相を示している。これらは併存していたと考えられることから、調査区北側は、東西に長い地割りの町屋であるといえる。絵図では、七条通沿いの両側町を材木町、高倉通沿いの両側町を皆山町としていることから窺うことができる。なお、溝 53 の位置は、第 2 面の土地境、第 3 面の柱列 3 の位置に近接しており、途中、耕作地の時期を挟むものの、土地境として認識されていたと考えられる。

また、蔵 77 が廃絶した後、鉄滓を多量に含む土坑が築かれており、坩堝を確認していることから、近辺で鑄造を行っていた可能性が高い。

以上のことから、今回の調査では、御土居に伴う遺構の確認はできなかったが、中世七条町の縁辺部から、東本願寺新寺内町に取り込まれ、さらに内浜の建設以降、活発な土地利用が行われていく様相を明らかにすることができた。今後、周辺域の調査を行う際は、御土居の痕跡、内浜の構造、七条町との関連に十分留意する必要がある。

註

- 1) 吉川義彦『平安京跡発掘調査報告 左京八条四坊一町』関西文化財調査会 2004 年
- 2) 大阪府教育委員会・(財)大坂文化財センター『日置荘遺跡』—近畿自動車道松原はさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書— 1995 年
大阪府堺市所在日置荘遺跡では中世にさかのぼる瓦質僧形像の出土例がある。頭を丸めた僧形の頭部で、大きさは幅 8 cm、奥行き 8 cm、高さ 9 cm ほどで、今回調査の例より小型である。僧形像の他、瓦質の灯明台台座、仏花瓶、護摩鉢も出土し、廃絶した中世寺院が想定されている。
- 3) 「元禄十四年實測大絵図（後補書題）元禄 14（1701）年」『慶長 昭和 京都地図集成 1611（慶長 16）年～1940（昭和 15）年』柏書房 1994 年

表3 遺物観察表

No.	遺構	種類	器種	法量 (cm)			胎土	釉薬	産地	備考
				口径	器高	底径				
1	土坑88	陶器	皿	10.6	2.1	5.0	密・灰色	灰釉	京都	油受皿、内面～外面口縁施釉
2	土坑88	陶器	皿	11.6	2.7	4.2	密・灰色	灰釉	京都	油受皿、内面～外面口縁施釉
3	土坑88	陶器	灯火具	(6.4)	8.3	3.4	密・灰白色	鉄釉	京都	燭台
4	土坑88	陶器	蓋	9.8	2.4	6.3	密・にぶい赤褐色	鉄釉	京都	つまみは菊
5	土坑88	陶器	蓋	11.3	2.5	5.3	密・白色	鉄釉	瀬戸美濃	草花文、模倣鼠志野か
6	土坑88	陶器	椀	11.0	6.0	4.6	密・浅黄色	灰釉	京都	丸椀、見込みに目跡3箇所残る
7	土坑88	陶器	鍋	19.4	[7.0]		密・灰色	鉄釉	京都	
8	土坑88	陶器	鉢	(26.8)	[5.9]		密・褐灰色	内面鉄釉 外面刷毛目	唐津	
9	土坑88	土師器	焙烙	(26.0)	[4.7]		やや密・浅黄橙色		深草?	外面スス付着
10	土坑88	磁器	椀	(10.0)	5.4	3.4	緻密・白色	染付	伊万里	小広東椀、内面見込み一重圏線と梵字、外面体部四方禪文
11	土坑88	磁器	椀	(10.0)	5.3	3.7	緻密・白色	染付	伊万里	丸椀、内面目跡4箇所、外面山水、松、花文
12	土坑88	磁器	椀	(12.0)	7.2	5.2	緻密・白色	青磁染付	伊万里	丸椀、高台銘「角福」、内面口縁部四方禪文、見込み二重圏線と草火文
13	井戸49	焼締陶器	甕	10.4	22.8	12.9	緻密・灰色	内面灰釉 外面鉄釉	信楽	外面口縁～肩部にかけて灰釉の漬け掛け
14	溝53	陶器	椀		[2.7]	4.3	やや密・鈍い橙色	刷毛目	唐津	高台畳付に砂目痕
15	溝53	陶器	瓶		[4.0]	4.1	密・灰白色	鉄釉	京都	底部穿孔
16	溝53	陶器	鍋	(24.4)	[8.6]		密・浅黄橙色	鉄釉	京都	
17	溝53	磁器	皿	13.2	3.7	(5.4)	緻密・白色	染付	伊万里	内面山水文、高台畳付に砂目痕
18	溝53	磁器	猪口	(7.2)	5.0	4.6	緻密・白色	染付	伊万里	外面草火文、高台銘は不明
19	溝53	磁器	椀	(5.8)	3.5	(2.6)	緻密・白色	染付	伊万里	内面山水文、高台畳付に砂目痕
20	溝53	金属製品	煙管	全長6.3		火皿径1.8				真鍮製、鍛造
21	蔵77	土師器	皿	(10.0)	2.5		密・にぶい橙色		在地	凹状圏線
22	蔵77	土師器	皿	(11.0)	2.5		密・褐灰色		在地	凹状圏線
23	蔵77	土師器	皿	(11.0)	1.6		密・浅黄橙色		在地	凹状圏線が二重
24	第1層	土師器	鉢	8.0	3.2		密・浅黄色		在地	内面底部に「□一日□」の墨書
25	土坑70	土製品	蓋	全長7.6	厚さ2.2	残幅5.3	粗・明褐灰色			炉蓋か
26	土坑70	土製品	埴埴	13.4	18.4	10.2	粗・黒褐色			
27	土坑13	土製品	埴埴		[14.4]	(17.0)	粗・黒褐色			青銅付着
28	土坑13	土製品	埴埴		[17.4]	(20.0)	粗・黒褐色			
29	土坑162	瓦器	瓦灯	15.3	15.4	16.6	粗・黄灰色			
30	土坑154	磁器	皿		[3.5]	8.6	緻密・白色	染付	伊万里	内面幾何学文、高台畳付に砂目痕
31	井戸49	焼締陶器	播鉢	37.8	17.9	16.8	密・浅黄色	鉄釉	信楽	
32	第1層	焼締陶器	播鉢	34.0	15.35	14.1	密・黄灰色	鉄釉	丹波	
33	土坑153	土師器	壺	2.0	2.4	1.8	密・浅黄橙色		在地	つぼつぼ
34	土坑153	土師器	皿	(5.4)	1.1		密・橙色		在地	
35	土坑153	土師器	皿	(5.8)	1.2		密・橙色		在地	
36	土坑153	土師器	皿	5.8	1.3		密・橙色		在地	
37	土坑153	土師器	皿	(8.8)	2.1		密・にぶい橙色		在地	

No	遺構	種類	器種	法量 (cm)			胎土	釉薬	産地	備考
				口径	器高	底径				
38	土坑153	土師器	皿	(9.8)	2.3		密・橙色		在地	凹状圏線
39	土坑153	土師器	皿	10.3	2.4		密・にぶい橙色		在地	凹状圏線
40	土坑153	土師器	鉢	(10.5)	5.0		密・浅黄橙色		在地	
41	土坑153	瓦器	火入	(8.2)	[3.9]		密・浅黄橙色			
42	土坑153	土師器	焙烙	(30.6)	[4.7]		密・浅黄橙色		深草?	
43	土坑153	土師器	壺	12.6	19.5	18.8	やや密・にぶい 橙色			火消し壺、内面剥離が進む、粘土板に粘土紐 巻き上げ整形、底部との接合痕をカキトリ
44	土坑153	陶器	椀	6.6	4.2	3.4	密・黄灰色～に ぶい橙色	鉄釉	瀬戸美濃	天目小茶椀
45	土坑153	陶器	椀	13.8	7.1	5.5	密・灰白色	内面灰釉 外面銅緑釉	唐津	
46	土坑153	陶器	椀	12.2	7.4	5.0	密・灰白色	内面灰釉 外面銅緑釉	唐津	内面底部に砂目痕
47	土坑153	磁器	椀	(11.4)	6.2	(4.2)	密・白色	染付	伊万里	草火文
48	溝110	土師器	皿	5.8	1.4		密・にぶい橙色		在地	
49	溝110	土師器	皿	6.2	1.6		密・淡黄色		在地	へそ皿
50	溝110	土師器	皿	(12.8)	[1.6]		密・にぶい橙色		在地	
51	溝110	土製品	鋳型	全長 [3.8]			粗・にぶい橙色			鋳型の種類は不明
52	土坑257	土師器	皿	(15.5)	2.4		密・にぶい黄橙色		在地	
53	土坑257	土師器	皿	(16.0)	[2.3]		密・にぶい黄橙色		在地	
54	土坑257	陶器	皿	(12.0)	[1.7]		やや粗・灰白色	灰釉	瀬戸美濃	
55	土坑257	石製品	砥石	全長 10.7			灰黄色			粘板岩、溝状の擦痕あり
56	溝271	土師器	皿	(16.0)	2.9		密・浅黄色		在地	
57	溝271	土師器	皿	(17.0)	[2.8]		密・浅黄色		在地	
58	溝271	磁器	椀	13.6	6.3	3.7	緻密・白色	青磁	龍泉窯	見込み一重圏線内に花文のスタンプ文、高 台内側以外全面施釉
59	溝271	瓦器	羽釜	(26.0)	[5.6]		やや密・灰白色			
60	溝271	瓦器	羽釜	(28.8)	[14.3]		やや密・灰白色			外面底部にスス附着
61	土坑32	須恵器	甕		[5.5]		密・灰白色	自然釉		外面に鳥のスタンプ文
62	井戸49	土製品	牛形	40.5	14.5	21.6	長石・暗灰色			瓦質
63	土坑153	伏見人形	翁	4.2	4.6	(7.4)	密・黄橙色			
64	土坑153	伏見人形	千手観音	(5.6)	2.9	2.0	密・黄橙色			
65	土坑153	伏見人形	千手観音	(5.6)	2.8	(0.5)	密・黄橙色			
66	土坑153	伏見人形	鯛	6.4	(6.1)	1.7	密・黄橙色			
67	土坑153	伏見人形	鳩	(7.4)	3.5	5.2	密・黄橙色			
68	第1層	仏像形	仁王像	(9.5)	(5.2)	(12.0)	密・暗灰色			瓦質、右足
69	第1層	仏像形	仁王像	14.5	4.5	(25.0)	密・暗灰色			瓦質、「あんノ左」
70	第1層	仏像形	仁王像	7.0	5.3	(20.0)	密・暗灰色			瓦質、「あん左」
71	第1層	仏像形	仁王像	5.0	3.2	(21.5)	密・暗灰色			瓦質、「あん」
72	第1層	仏像形	仁王像	14.5	6.1	(20.2)	密・暗灰色			瓦質、「うん右」
73	第1層	仏像形	仁王像	3.8	3.5	(8.0)	密・暗灰色			瓦質、「□ん左」
74	第1層	仏像形	仁王像	4.7	2.7	(5.5)	密・暗灰色			

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしちじょうしぼうよんちょうあと							
書名	平安京左京七条四坊四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-6							
編著者名	西森正晃・前田義明							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 しちじょうしぼうよんちょうあと 七条四坊四町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 しもじゆざやちょうどおり 下珠数屋町通 あいのまちひがしいる 間之町東入 ひがしたまみずちょう 東玉水町296 ばんち 番地	26100		34度 59分 23秒	135度 45分 44秒	2008年6月 16日～2008 年8月22日	289m ²	小学校 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 七条四坊四町跡	都城跡	室町時代	溝、土坑、柱列	土師器、瓦器、須恵器、 施釉陶器、輸入磁器、 石製品、土製品				
		江戸時代	土坑、柱列、蔵、 礎石列、石組み溝	土師器、瓦器、陶器、 磁器、焼締陶器、土製 品、伏見人形、金属製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-6
平安京左京七条四坊四町跡

発行日 2008年9月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961